

『景観の邪魔』

綾門 優季

○ 登場人物

吾郎

美華

俳優をあきらめた男

朝子

杉沢

瀧口

主婦 1

主婦 2

湯沢

小沢

深沢

大学生

夫

妻

この戯曲は、積極的にシーンの順番を並べ替えて上演することを原則とする。

二〇一八年から二〇四一年までの二十四年間、東京二十三区と武蔵野市で起こる断片的な出来事を任意で抜き出していく。

決して起こり得ない、でもどこかあり得そうな近未来。

なお、配役について、俳優一人につき一役をあてがって上演することは禁止とする。登場する役よりも少ない人数の俳優が複数の役を兼ねて演じるか、役よりも多い人数の俳優が一つの役を交代して演じるか、あるいはそのどちらの方式も採用して時と場合によって使い分けるか、選ぶこと。この戯曲の上演にとって重要なのは、俳優と役がいつでも接続可能／分離可能なようにみえる雰囲気である。彼ら／彼女らは、取り憑いたばかりの神の化身のようでもあり、いま目の前を通り過ぎて街中へと消えていった名も知らぬ誰かのようでもあり、隣人のようでもあり、生涯決して遭遇しない運命にある人のようでもあり、わたしのようでもあり、あなたのようなでもある。曖昧さを重視すること。いつでも誰にでもなれるようなスタンスを維持して、俳優は上演に臨むこと。

この土地に対する愛着を持ってください。この土地で暮らしていなければ持つていなかったはずの要素がどれだけ多いか知ろうとしてください。この土地に昔何が建っていたか、何が壊されたか、どういう理由で今ここにこの建物があるのかを学んでください。そうしないと何もかもを失った時に人が抱き締めることの出来る唯一の根拠さえ、あなたは失うことになるのです。これは催眠術でもなければ呪いでもなく、ましてやあなたを陥れるための罠でもありません。もう一度言います。この土地に対する愛着を持ってください。あなたがその意思を確かに持つその時まで、何度だって繰り返します。この土地に対する愛着を持ってください。

吾郎

大学に近い、というだけの理由で住み続けた家から、大学を卒業した、というだけの理由ですぐに離れるのは至極真つ当なことのように思えるけど、すべての荷造りを終えて眠った引越前夜に、不思議なお告げが僕の脳を支配する。夢の類ではない。一言一句、忘れることが出来ないからだ。不気味で不思議なお告げがもう少し早ければなんとかなっただろうが、もうすでに遅い。荷造りは終わってしまったのだ。明朝に引越しは完了してしまう。キャンセル料を迷わず払えるほど、僕は裕福じゃない。それに、練馬には何の愛着もない。家から徒歩五分だから練馬区役所の手続きがしやすかった、以上のメリットをこの家を感じていない。特に行くところもない。

吾郎

しかしバチが当たったように引越当日は大雪で、引越し業者が遅れる。余裕で間に合うはずだった夜のバイトも間に合うか雲行きが怪しくなり、とうとう三十分だけ遅刻する旨を電話で伝える羽目になり、しかも三十分以上遅れる。店長に「珍しいね」と言われ、「まああんまり吾郎くんは遅刻しないほうだしもうないと思うけども、一応遅刻重なるとペナルティだから、ちよつと気に止めておいてね」と釘を刺される。二年以上やってるバイトで一度も遅刻してなかったのに。久々の汚点にショックを受ける。ショックを受けるだけで済めばよかったのだけど、その日から妙なギクシャクした人間関係が続いて気まずく、極めつけに交通事故に巻き込まれて一週間バイトのシフトを飛ばす。「吾郎は悪くないじゃん」と同僚も言ってくれたのだけどそれをきっかけに、いつそのことバイトをやめてしまう。卒業後は横浜の実家に住む。家から徒歩五分の新しいバイトをはじめ、ほぼいっしょに入った三歳下の美華といい感じになって付き合い始める。付き合って半年して美華がいっしょに住みたいと言い出す。実家暮らしの僕のところはあり得ないから自動的に美華の家に住むことになるけど、美華の家は練馬だ。なんだか不吉なものを感じる。それでなくともせつかく引越し

たのに一年たたずに戻ってくるのも切なさすぎる。美華は「なんで？　なんで住みたくないの？」と度々迫る。僕が覚えている嫌な予感を率直に話すとオカルトだと美華に思われてしまう気がして固まる。会いたくない誰かが練馬で絶えず手招きしているような気まづさがあったて、素直に「うん」と言うことが出来ない。

(4)

朝子 霊感は決して強いほうじゃないんです。修学旅行で心霊写真が何枚も何枚も出てきてちよっとした騒ぎになった時も綺麗に避けるようにわたしの写った写真だけフツ―でしたし、こつくりさんに混ざったらビビるくらいコインが動かなくなって場が思いっきり白けムードになったこともありましたが、むしろ霊をよける力さえ備わっているんじゃないかと推測していたぐらいだったんですよ。だからこんなにはっきり見える時点で、もはやこいつは霊なんかじゃなくって、もはや人じゃないかとひそかに勘繰っている最中なんですよ。

杉沢 だから霊じゃなくて神だってば！ 失礼だなあ。

朝子 朝六時だよ？ 目覚まし時計より先にわたしのこと起こすのやめてくれる？ なんか雰囲気のある感じの夜に出てくれない？ そういうこと考えたことある？ 大体なにその服？

杉沢 竹下通りで買ったんだよ。

朝子 原宿の土地神だからって原宿満喫してんじゃねえよ！ 興奮め！ しかも昨日と同じ服だよね？

杉沢 最近ひんぱんにあちこちに出てるからいちいち着替える暇なんてないんだ。

朝子 朝昼晩と顔を付き合わせるとか、家族かよ。

杉沢 家族の忠告は真剣に聞いた方がいいよ。君はこの家を離れるべきじゃないんだ。
朝子 家族じゃないじゃん！ うちの家族はもつと無干渉だよ！

と、ドアをノックする音。瀧口、登場。

瀧口 失礼します。

朝子 瀧口さん、こちらからドアを開けるまで入って来ないでくださいって何度も、

瀧口 仕方ないじゃないですか、鍵が壊れてるんですから。

朝子 何が仕方ないのかなあ？ 節度というものは備わってないのかなあ？ ドアの前で立ち止まることすら出来ないのかなあ？

瀧口 もう退去期限は過ぎてるんですよ？

朝子 だからこっちも出ていきたいのはやまやまなんですけど、

と、杉沢、瀧口をひよいとかついで、えっほえっほと走っていく。退場。杉沢だけ戻ってきて、

杉沢 …で、さっきの話の続きだけど、
朝子 続けられないよ！ 乱暴すぎるよ！

と、迅速に瀧口、再登場。

瀧口 またそうやって超能力使って！ 今度という今度は書類にハンを押してもらおうんですから！

朝子 わたし超能力なんてないですよ、あともっと動揺してください！ しかもわたしが押していいんですか？ こういう重要な親じゃないんですかフツー？

瀧口 仕方が無いじゃないですか、あなたの御両親、お仕事が忙しくて全然会えないんですから。

朝子 簡単にあきらめないでもらっていいですか？

と、杉沢、瀧口をひよいとかついで、えっほえっほと走っていく。退場。杉沢だけ戻ってきて、

杉沢 土地への執着を簡単に手放すなんて、自殺行為も甚だしいな。

朝子 原宿の土地神なんて聞いたことないよ。せめて森とか川とか洞窟とかにいてよ！

杉沢 わかってないなあ。すべての土地に土地神は存在するんだよ。全員一丸となつて東京を守ってるんだ。

主婦1 聞きました、こないだのニュース。

主婦2 聞きました、聞きました。

主婦1 新国立競技場の放火犯、日本人なんですってねえ。

主婦2 ええ、ええ。

主婦1 海外からオリンピックにわざわざ訪れてくれた人の良さそうな夫婦をあれだけ犯人扱いしといて、結局日本人だったなんてねえ。

主婦2 さぞかし、日本に対する不信感を募らせたでしょうねえ、冤罪に巻き込まれたあの夫婦。

主婦1 そりゃあそうでしょうよお。アタシなんて家が新宿区にあるでしょう、新国立競技場からも決して遠くない距離でしょう？ おかげで、こないだのニュースが流れるまで、海外からの方を警戒しちやいましたもの。すれ違うたびに。

主婦2 海外からの方、グツと増えましたものねえ。日本語じゃない言葉で話す方も最近多いでしょう、電車内だと目立ちますもの。でも噂だと、新たに捕まった日本人も無実を主張してるらしいですよ。

主婦1 そりゃあ、例え犯人だって無実を主張するでしょう。

主婦2 いや、それにしても言い訳が変なんですって。

主婦1 変？

主婦2 火をつけた奴が目の前にいて、捕まえようと追っていたら、突然消えたって言ってるんですって。嘘にしては現実味がなさすぎるんじゃないかしら。

主婦1 あなた、まさか本当にそんなことがあったと信じてるの？

主婦2 まさか。ただ、不気味だなんて思っただけです。オリンピックが決まってから、いろんな嫌なことがぜんぶオリンピックのせいにして。オリンピックの呪いなんじゃないかって。

主婦1 それは、気のせいってわけでも、ないでしょうけどねえ。

美華

閑古鳥が鳴いているってほどでもないけど、ガランとした印象があるのは否めない。うちの劇場のピークは完成してすぐに訪れて、あの時を超える熱狂はもう二度と訪れないとわかっているのに、職員みんなは一樣に、ぼんやり夢を見続けているような顔をしていた。いや、感謝はしているんだ、オリンピックには。池袋に新しい八つの劇場が出来なければ、就活が難航していた私を拾ってくれる場所なんてなかっただろうし、やっと内定を貰った時は涙が出るくらい嬉しかった。家からわりと近かったし、でもその涙も乾ききってしまった。こんな沢山の大きい劇場が毎日必要になるほど、人々が熱狂するのは何年後になるんだろう。それまでにこの場所が、別の場所になっていなければいいけど。まさかそんなすぐになくはないだろうけど……。『美華がそんなに今の職に不満を持ってるなら、新しい仕事探せば？』と吾郎は言う。吾郎はどうせ、それを口実に練馬から一刻も早く引っ越したいだけだ。

朝子

わたしの家を壊してまで建てた店が早速潰れた。明らかにオリンピックをめぐってつくったような店だったので、オリンピックが終わったあとにうまく軌道を修正出来なかったんだと思う。もしかしたらあの土地神の呪いかもしれないけど、もうみえなくなっちゃったからわからない。西荻窪の暮らしにはとても満足してるから、お金を貰えて引っ越し出来たのは結果的に良かったんだけど、西荻窪の土地神にはまだ会えない。わたしの土地神を受信するアンテナと、西荻窪が合わないのかもしれない。

セリフの裏で、小さく『マクベス』のセリフの音声が流れている。

あるいは逆に、俳優が『マクベス』のセリフを喋っており、心の中の声として以下のセリフが音声として流れている。

俳優をあきらめた男

下北沢の小さな劇場でマクベスを殺しながら急に「就職しよう」と思った。決して今回の舞台の出来が悪いわけでもないのに。オリンピックのせいだ。オリンピックのせいで、俳優をはじめてすぐにトントン拍子で大きな舞台の準主役を射止めて、それ以来大観衆にスタンディングオベーションを受ける快樂がアタマからこびりついて離れなくなった。オリンピックがなければ、あんな甘い蜜をいきなり吸うこともなかったのに。オリンピックのせいだ。あんな快樂、十年後ぐらいに遭遇したかった。人生設計的に。

湯沢 はい、それでは定例の土地神会議を始めたいと思います。それではまず目黒区代表の私から短い挨拶を、

小沢 要らないですよ、湯沢さん、参加者三人で挨拶なんて……。だいたいで目黒雅叙園でやるんですか。もつと会議にふさわしい場所あるでしょ。

湯沢 いいじゃない、神っぽいじゃない。

小沢 どうせこないだ千と千尋の神隠しでも観て影響されたんでしょ。

湯沢 小沢、鋭いね！ 金曜ロードショーで久しぶりに観たんだが……。やっぱいいよね、あれ。それに形から入るのって大事じゃない。

杉沢 はじめてきたけどやっぱり映画のモデルになっただけのことはある、凄い建物だなあ。ほら、基本的に原宿から出ないからさ。

小沢 杉沢さん、目黒雅叙園会議じゃないですよ！ 東京をもう一度復活させるための対策を練るんじゃないんですか！

杉沢 でも、小沢くん、この出席率じゃなあ。渋谷区と目黒区と中央区で集まったって何も出来ないよ。二十人も欠席って会議として成り立ってないもの。

湯沢 みんなオリンピックで疲れちゃったんじゃない？ それに、いいんじゃない？ もうある程度人口、大阪とか京都とかに渡したほうが健全じゃない？

小沢 ちょっと何言ってるんですか、じゃあ何のために今日この会議やってんですか。

杉沢 小沢くん、それはね、次の会議の場所を決めるためだよ。

小沢 はあ？

湯沢 目黒区は今回やったし、渋谷区は前回やったし、次回は中央区の小沢で決まりじゃない？

杉沢 じゃあ今回は、もう終わりにしますか。

小沢 ちょっと、いいんですか、人口減る一方ですよ。

杉沢 小沢くん、私も出ていこうとするひと片っ端から説得したり、頑張ったけど駄目だったんだよ。時代の流れなんだよ。

湯沢 東京の役目も一区切りついたんじゃない？

小沢 遠い目をしないでください！ まだまだ諦めないっすから！

美華 ごめん、好きなひとができたの。別れてほしい。

吾郎 …びっくりしたよ。

美華 ちよつと唐突だったもんね。

吾郎 いや、そこじゃなくて。なんで絶叫マシンがあがってる最中に言うんだよ。

美華 最後までいい、最初に吾郎とデートに行った花やしきにしたくて。

吾郎 いや、そうじゃなくて。花やしきデートを責めてるわけじゃなくて、こういう話はせめて絶叫マシンに乗る前に、

美華 スペースショットね。

吾郎 ああもう。せめてスペースショットに乗る前にそういうことはあああああああああ

ああ…!!

——東京都現代美術館やレインボーブリッジのある江東区は、その大部分が、江戸時代に大規模な埋め立てが行われて生まれた土地です。それまで、ここはほとんど海でした。十年後に、百年後に、千年後に、東京のどこに人が集まっっていて、どこが海になっているのでしょうか。江戸時代の人たちが思い描いていた未来といまとは、どれぐらいズレてしまっているのでしょうか。いつの時代にも、タイムマシンはありません。未来の答え合わせは、未来に生きる人たちにしかできません。これから、あてずっぽうの予言をしてもいいですか？ あてる気のない未来です。(深呼吸) ここは、もうすぐ、海！

2027年 葛飾区「寅さん」

——「二人でいる時間を楽しめなくっちゃ。」「って寅さんも言ってるよ。」

美華

実家以外は申し分ない彼氏だ、というのが藤沢君に対しての感想だ。藤沢君はずいぶん前に俳優をやめてから、給料は安いけど真面目に働いてるし、子供が欲しいという欲望も一致してるし、趣味も合う。こないだご両親に紹介してもらった。二人ともいい人そうだし、結婚してから急に手のひらを返すような見せかけの優しさにも見えなかった。年齢的にも、いま結婚しないと結局子供を持たないままな気がする。ただ、ただ、彼氏の実家のある北千住という街が、ぜんっぜん好きになれない！ 治安は悪いし、子育てしづらそうだし最悪！

杉沢

いやいや、住めば都っていうじゃないですか？

美華

え、誰？

杉沢

どうも、杉沢です。

美華

誰なの！

杉沢

誰かから聞いたイメージに惑わされしないで、小さなことでもいいから、その土地にしかないものに、目を凝らしてくださいねー。

美華

その通りすがりの、北千住では浮いている、どっちかというと原宿にいそうなタイプの若い男は、大きな声でわたしにそう叫んだ。その声に、通行人は誰も反応してなくて、白日夢みたいだった。この変な出来事と関係があるかわからないが、わたしはその後すぐに結婚して、彼氏の実家で暮らし始めた。

杉沢 深沢さん、どうして会議に来ないんですか？

深沢 別にいいじゃない、杉沢君が困ることじゃないでしょ？

杉沢 こうやって僕が深沢さんのもとをわざわざ訪ねないといけないっていう意味では、困ってます。

深沢 いいじゃない。放つといてよ。

杉沢 せめて適度にサボってください。十年以上来てないの、深沢さんぐらいです。

深沢 どうせまたどうでもいい話、うだうだしてるんでしょ？

杉沢 最近はそのでもないですよ。あちこちで小さな地震が起こって、東京全体が不安に包まれてます。ただでさえ人口が減ってるっていうのに、深刻な問題です。僕の管轄の渋谷区にとっても、深沢さんが管轄の中野区にとっても。

深沢 杉沢君、中野区が人口増えたきっかけって知ってる？

杉沢 知らないです。

深沢 関東大震災よ。

杉沢 え。

深沢 関東大震災をきっかけに、いろんな施設が出来たの。今の中野区の発展は関東大震災のおかげなの。

杉沢 でも次もそれをきっかけに人口が増える保証なんてないですよ。

深沢 減る保証もないでしょ。あのね、杉沢君、わたしが言いたいのは、何が災厄なのかってことは、常識の物差しで測らないほうがいいってこと。なるようになるわ。

杉沢 …お邪魔しました。

深沢 わざわざ来てくれて、ありがとう。本当にコトが起こりそうになったら流石に行くから、その時また呼びに来てね。

湯沢 小沢さあ、わざとこのタイミングで軽く地震起こしたんじゃない？

小沢 別に。ただの偶然すよ。

湯沢 神だからってやっていいことと悪いこと、あるんじゃない？

小沢 だからやってないですって。そんな力ないですって。いいじゃないすか。東京のあち

こちに発電所建てる計画、しばらく見送りになったんでしょ。万々歳じゃないすか。

湯沢 なにも中央区に原発建てようってわけじゃないじゃない。

小沢 火力ならオツケーってわけじゃないんすよ。

湯沢 小沢、我儘通して恥ずかしくならない？

小沢 我儘？ どっちが我儘なんすか？ 節電も出来ないような都民は全員いつでも出て

いってくれて構わないっすよ。

湯沢 そんなんだから中央区、千代田区に抜かれて人口が二十三区のなかで最下位に落ちち

やったんじゃない？

小沢 湯沢さん、自分は土地を守るための神として必要な責務を果たしてるだけですから。

みんな狂ってるって思ってますから。石投げられたって自分が正しいって信じてます

から！

湯沢 中央にいるからって、自分が世界の中心だって勘違いしてるんじゃない？

小沢 逆っすよ。東京が日本の中心じゃなくなったほうが、この土地を結果的に守ることに

つながるんだって信念、それだけっす。

吾郎

美華と別れてから、しばらく放心状態で生活して、特に新しい恋愛を始める気力も回復しないまま、だらだらと目の前の仕事をこなすだけの消化試合みたいな日々を送っていたけど、こないだの地震で不運なことに二階の端の部屋から出火したウチのアパートが半焼、僕の部屋は全焼してから、大切な回路がブツツリと切れた気がした。「限界だ」と自宅の前の道の中央で真夜中に絶叫した。まるで元カノに関するあらゆるものを思い出したくないみたいに、東京に纏わる何もかもが嫌になる。次の週に薄々嫌気が差していた職場を衝動的に辞める。はじめての一人旅に出る。行ったことのない土地に住もうと決意する。行き先もわからないまま、新幹線切符売り場の列に並ぶ。

震度五の地震のあとに、隅田川が原因不明の増水で何度か氾濫しかけたというニュースは、ちよどその頃世間を賑わせていた芸能人の不倫問題にかき消され、特に注目されることはなかった。

震度四の地震のあとに、荒川が原因不明の増水で親子が溺れ、子供の方は意識不明の重体になったというニュースは、ちょうどその頃世間を賑わせていたアジアで頻発するテロの問題にかき消され、特に注目されることはなかった。変な学者が隅田川と荒川の増水を結びつけて変な学説を唱え、信じた者は変人扱いされたが、本当はある程度当たっていた。三年後に大震災が起こる。

昔からずっと二十三区内出生率ナンバーワンを維持してきた江戸川区が遂に、世田谷区や練馬区を超えて、二〇三三年、トップの人口を誇る区に躍り出た。江戸川区で生まれ育った夫婦が江戸川区で子供を産む。保育園も昨年の改革で続々と新設され、他の区からの移転者も多い。すべての区が江戸川区に憧れられれば少子化も少しは改善するのだろうが、残念ながら東京全体としてはより深刻化している。東京で生まれ育った子は大学進学とともに東京以外に出ていくことがスタンダードになった今、人口増加の可能性はゼロに等しい。

一年後に関東大震災を控え、珍しく二十三区の土地神が一人も欠けることなく出席した品川プリンスホテルでの全体会議だったが、現状を憂えるばかりで、東京都民をこれ以上減らさないようにする打開策は、誰の口からも出ることは無かった。あるいはもう疲れ切って、いつそのことごとく人口を減らしたいのかもしれない。そういう表情を皆、浮かべていた。

朝子

最近、いちいち指摘するのも面倒くさいぐらい、他のひとにはみえていない人たちがみえる。いやきつと人じゃない。あの疲れた顔でおにぎりを頬張っているサラリーマンも、電車内であることも構わずに化粧に余念のないおばさんも、優先席で爆睡している若者も、高架下で昼間からお酒を飲んでいる髭ボーボーのおじさんも、高級っぽい変な色のランドセルを担いでいる小学生も、血走った目で何処かに急いでいる警察官も、同じことを二度言わせるやる気のないコンビニバイトも、歩道で泣きながら彼氏っぽい人と電話しているOLも、春なのにハワイアンな服装で堂々と闊歩しているお爺さんも、ベビーカーに放置されている真顔の赤ん坊も、みんなみんな、今思えばたぶん土地神だったんだろう。ぼんやりと良くない方向に向かっている感じのする東京で、土地神たちがにわかにならなっていることを、けれど誰にも伝えはしない。わたしの胸のうちに留めておく。誰かを不安がらせたところで運命は変わらないうしろ、それに東京がどのような結末に至るとしても、わたしは何となく東京にこれからもずっと住み続ける気がしているのだ。関係ない。

かつてこの街はもっと特別な場所として認識されていたはずだが、いつのまにかこのような、他の街と区別のつかない、訪れたとしても翌日には思い出すことの出来ない、特徴のない街に成り下がってしまった。その訳は分かっている。人が増えたからだ。増えすぎた人が、様々な場所に六本木ヒルズもどきを造った。六本木ヒルズもどきはアップデートを重ねて、いつの間にかオリジナルを凌ぐほどになり、やがて六本木ヒルズは六本木ヒルズもどきのなかのひとつに数えられる程度のものに成り下がってしまった。元祖、という言葉や枕詞につけてありがたがるには、あまりにも都会的過ぎた。建物が変わったわけでもないのに、これほどまでに街は落ちぶれるのだ。このような街が増えていくことを嘆き悲しむ人はみんな残らずこのような街から出ていってしまった。鈍感なひとだけが残り、このような街を生み出すことに加担している。どうすることも出来ない。美しさなどはどうでもいいのだろう。たとえ醜い街であってもいいのだろう。欲望が成就されるのであれば。それがほとんどの人の本音だったのだ。人は欲望の奴隷だった、欲望のためなら何でも捧げることをいとわない。欲望は王だ。欲望は独裁者だ。欲望は監視装置だ。わたしの声は誰にも届かないが、心から絶叫しよう。死んでしまえ欲望。人を本当に殺してしまう前に死んでしまえ欲望。この街の景観は欲望が汚してしまったのだ。欲望がこの街を、致命的な場所にしようとしていることに、誰も気付こうとしない。

大規模な災害は今まさにこの地で起こるべきだ。なるべく多くの生物が地割れに飲まれば良い。なるべく高い津波が来て歴史的な建造物を洗いざらい流してしまえば良い。なるべく大火が街全体を覆って尊ぶべきあらゆるものは灰となれば良い。荒涼とした大地に、新しい国を作ろうとする者が現れるだろう。わたしは力を振り絞り、躊躇いなくそいつを殺す。可能性の芽を摘む。未来を打ち砕く。そうしなければこの美しさは保たれない。景観の邪魔となるものは生命に他ならない。生命の痕跡を排除しろ。何も無いということは美しさに他ならない。何かあることに美しさを見出すのは生命に操られた者だけだ。そいつの口を塞ぐ。石で声帯を潰す。鉄で舌を切る。それが終わったらわたしはようやく自らの生命を絶つ。完璧な秩序の誕生を祝いながら。

主婦1 不安な毎日が続くわね。

主婦2 関東大震災が起こる起こるって学者さんたちがテレビでいっても、本気で信じてはなかったのよ、みんな。

主婦1 不幸中の幸いだけど、わたしたちの住んでいる家は無事で良かったわよね。

主婦2 どうだろうねえ。本当に今の家に住み続けるのか、わたしはかなり怪しいわ。

主婦1 そうねえ、ぜんぜん楽しくないものねえ、住んでても。

主婦2 政治家の言ってることもコロコロ変わるしねえ。東京の復興支援も、結局何から手を付けていいのか、未だに揉めてるらしいじゃないの。東北の震災から何も学んでいなかったのよ、あの人たち。

主婦1 それもあるけど、わたし、国会議事堂が跡形もなくなったことが、大きいと思うわ。

主婦2 国会議事堂？

主婦1 まるでピンポイントで狙われたみたいに、国会議事堂だけ粉々になったじゃないの。

主婦2 でもほら、別の場所だって会議は出来るわけでしょう。

主婦1 でもまだ、誰も新しい場所に慣れていないのよ、きつと。培ってきた空気やリズムみたいなものが崩れたんじゃないかしらねえ。だって、政治家の発言をとっても、今はなんだか地に足がついてないって感じでしょ。自信を持って間違ったことを言ってるって感じじゃなくて。

主婦2 そういえばそうねえ。

主婦1 みんな転校生みたいな気分なのよ。どう喋っていいか、どう振る舞っていいか、ただだよくわからないの。そういう場所なのよ。今の東京は。

主婦2 はあ、引っ越そうかしら。

主婦1 わたしも、夫と相談してるところよ。

主婦2 離婚してでもいいから、引っ越そうと思ってるわ。

主婦1 穏やかじゃないわねえ。

主婦2 そう？ 吹っ切れたっていうか、いきつけになったと思ってるわ。そういう意味では、震災には感謝してるわよ。

大学生

子供の頃からコツコツと勉強し、塾に通い、進学校に行き、恋愛にも娯楽にも目をく
れなかったのは、どうしても東大に入りたかったからだ。その東大がなくなった。
歴史的な建物であればあるほど、跡形もなく消え去ってしまった。瓦礫の山になって
しまった。再建するつもりではあるらしいが、つもりだけで特に目処はたっていない。
親は「じゃあ京大にすればいいじゃないの」なんて適当なことを言うけど、そう
いう問題じゃない。頭の良さそうな大学に入りたかったわけじゃない、僕は東大に入
りたかったんだ。震災が起こってからモチベーションを失い、成績はみるみる下がり、
地元の国立大学になんとか受かって、だからだと授業を受けている。普通に地元で就
職するんだろうな……。一度だけ、東大のあった場所に行ってみただけど、これといっ
た感慨はなかった。

——きゅうりを両手で折ったかのように、ぽつきりと折れた東京スカイツリーだったが、二〇三八年には東京スカイツリーに対する人々の関心が薄れていたので、改築したいとか、再建したいとか、そういう声はあまりあがらなかった。急いで新しく作らなければならないものは、他にたくさんあったから。

夫 あ。

妻 なに。

夫 劇場。

妻 劇場？

夫 ここらへんにあった劇場がなくなってる。

妻 どういう名前の？

夫 ハル：ハルカゼシヤ、みたいな名前だった、確か。

妻 変な名前。

夫 そっか、なくなったか、そうだよな、だいぶ前だもんな。震災でいろんな場所がなく

なったもんな。意外でも何でもないな……。

妻 いつ頃いつてたの？

夫 君とまだ出会う前だから、ずいぶん前だよ。

妻 結構前じゃん。

夫 いやでも意外とショックなもんだなあ、なくなったことも知らなかったぐらい、ぜんぜん舞台とか最近みなくなってたのに。やっぱりあれだなあ、どんな景色も、自分がいつ行っても昔のままでなるべく残ってて欲しいんだなあ。

妻 そんなに都合の良い場所なんてないじゃん。

夫 そんなに都合の良い場所なんてないんだけど。どこにもないんだけど……。

吾郎

何年ぶりかの大雪で飛行機が飛ばず、羽田空港で何時間も待ちぼうけを食らう。待合室でぼんやり電光掲示板を眺めていると、そして人の流れを眺めていると、ずいぶん東京も変わってしまったな、と感じる。大晦日のこの時期、昔は東京から実家へ帰ろうとする人たちが大混雑したものだっただけ、今はどちらかというと東京の実家へと帰ってきた人たちが目につく。東京はもう、人口過密都市ではないんだなあ。…：そ
ういえばずいぶん前に、こんなふうには大雪で待ちぼうけを食らったことがあった。確か東京の何処かで。何処だったのかはもう、はっきりとは覚えていない。

朝子

東京の半分が、関東大震災の影響で壊滅的な被害をこうむってしばらく経った。最近、暮らしている街に関する興味をようやく持ち始めた気がする。これまでゲームで次の面に進むのと同じような感覚で生きてきた。目の前の土地には歴史があつて、歴史がなければこのような土地ではありえなかった、という事実を、あえて無視して暮らしてきた。そのほうが楽だから。何も考えたくなかった。多すぎる人々を全員無視したかった。でも、例えば今わたしがこの地面に埋めたものは、誰かに知らせなければずつと埋まったままで、そんなものはきつとこの街に数え切れないほど埋まっていて、数え切れないそれらがこの街を、この街でしかありえなくしたのだ。誰かの思い出になつているのだ。結構前に引越してきた吉祥寺はもう、有名な映画館も本屋も撤退したり、場所を移したりしてしまった。最早誰も寄り付かない渋谷や新宿にアクセスが良くても、メリットなんて何も無い。復旧してからずいぶん電車の本数も減つてしまった。だけど、この街が好きだ。昔よりも好きだ。今がいちばん好きだ。

(終わり)

【引用】

P 14 「一人でいる時間を楽しめなくっちゃ。」

寅さんの名言 on Twitter

“一人でいる時間を楽しめなくっちゃ。(渥美清) <https://t.co/oZnU2FB7CJ>”
(二〇一七年七月二十七日アクセス)

<https://twitter.com/torasameigen/status/739336112158572544>